

【審査論文】

詩人ヨネ・ノグチの「弁明」としての
The American Diary of a Japanese Girl

星野文子

The American Diary of a Japanese Girl
as Yone Noguchi's "Apology" for Being a Poet

Ayako HOSHINO

Abstract

This paper will examine Yone Noguchi's poetics and way of life concerning "being a poet," as expressed in his English novel, *The American Diary of a Japanese Girl* (1902). This book was considered his first and only non-poetry book in English published during his eleven years living in the United States and England. In contrast to scholarship that focuses on his work from the point of view of Japonism, or his personal life—Noguchi had a child with his American editor Leonie Gilmour, and their son was the well-known sculptor Isamu Noguchi—this paper will focus on Noguchi's obsession with poetry and "being a poet," as expressed in this work. Analyzing his idea of "being a poet," I will argue that this work, though a fictional novel, constitutes an attempt to write about the development of Noguchi's identity as a poet. The paper is based on the presentation at The Tokyo American Literature Society's section meeting of the monthly meeting on September 24, 2016.

キーワード：ヨネ・ノグチ（野口米次郎）、『邦文日本少女の米國日記』、詩人

Yone Noguchi. *The American Diary of a Japanese Girl*, Poet

はじめに

The American Diary of a Japanese Girl (邦題：『邦文日本少女の米國日記』、本論文で英語版を参照する際は *Diary* と記載) は、ヨネ・ノグチ（野口米次郎、1875年-1947年）が1902年、アメリカのニューヨークで出版した英語小説である。同書の主人公である18歳の日本人少女、“Miss Morning Glory”こと「朝顔嬢」が、イエール大学卒の叔父について渡米しアメリカ見物に行くという設定で、渡米前の準備から航海、アメリカ滞在など約半年に亘って綴られた朝顔嬢の「日記」ということになっている。執筆当時20代半ばのノグチは本名を伏せ、“Miss Morning Glory”というペンネームを使って出版した。出版直後は数十本の書評が書かれたほど話題性はあったものの、最終的に高い評価は得られなかった。しかし、不評に反してノグチは五版まで重版を重ね、翻訳や続編も出版した作品である。

話題性がありながら何故評価されにくい作品なのだろうか。そもそも同書は、名目上は小説だが、一般

的な小説とは体裁や構成が異なり、日記である。日記や書簡集といえば、通常は話題性の高い著名人のものが多く、その人の言動に興味を持たれるから出版されるのであって、匿名で一冊目に出すものではないだろう。それをわざわざ出版するからには、面白いフィクションに仕上げなくてはならない。ところが、同小説には筋書きというものが無い。ノグチは執筆過程で「僕は物語の筋書きというものをひどく嫌う」(CEL, no. 85, July 1901?)と書簡に書いており、実際、それに則って仕上げた。マークス氏は、筋書きがない点に加えて、説明を付けずに日本語単語をローマ字で表記する手法などは「日本語を知らない」読者を遠ざけると指摘し、断続的な段落や、アメリカの習慣や文化に対する再三の批判も読者を消耗させる、と論じている(Marx, 2002, 302)(マークス氏は2007年に、解説付きの同小説を出版している)。同書は、主人公の成長や、物語の展開には重点が置かれていないため、物語に引き込まれて完読するような娯楽にはなりにくいのである。

このような同書は、これまでの先行研究では、いくつかの文脈で論じられてきた。先ず挙げられるのが、同書が出版された時期や朝顔嬢の文化体験を意識した、ジャポニズムという文脈である。同小説が刊行されたのは、来日経験のある人やない外国人が、「日本を舞台とし、日本人を主要登場人物に扱った小説」(羽田、9)が人気を集めていた時代である。羽田氏はノグチの同書執筆の意図として、「巷にあふれる『まがい物』に対抗しようとして…自分ならばもっと正確に日本を伝えることができるという意気込みがあったのであろう」が、当時の大衆が求めたものと同小説には「かなりの温度差」があったのではと論じる(羽田、235)。ことに、ノグチの作品と比較されてきたのは、オノト・ワタンナ(本名:ウィニフレッド・イトン)という、日本人名のような響きを持つペンネームで、日本が舞台の小説を出版し成功した作家の作品である。1900年、ニューヨークに移動中のノグチは、経由したシカゴでワタンナと面識を持ち、一時はかなり頻繁に会っていたことはノグチの書簡からもわかる(CEL, no. 54, June 19th, 1900)。このワタンナの書いた『日本の鶯』(*A Japanese Nightingale*, 1901)は、「200版20万部」を売上げ、フランス、ドイツ、スウェーデン、イタリアでの翻訳、ブロードウェイの劇化など大成功を収めた作品である(羽田、110)。ノグチの朝顔嬢の日記の特徴やワタンナの作品との類似点、後に「日本人のふりをしている」ワタンナ批判者に転じ酷評を発表したノグチについては、宇沢氏が詳しく論じている(165-9)。また、松川氏は、ノグチが正しい日本の歴史や文化に固執するばかりに、より大きな枠組みであるアジア系アメリカ人・ワタンナの作品に込められた人種や階級、ジェンダーの問題などには目を向けず、ワタンナはかつて友人であったにも関わらず、半分アジア系の血を受け継ぐ女性の厳しい立場に理解を示さなくなった点を指摘している(Matsukawa, 50)。

さらに、同書は約11年間に及ぶ米英生活の中、アメリカで2冊、ロンドンで3冊目の英詩集を出版し、「日本唯一の英詩人」(『読売新聞』1903年11月25日)となったノグチの英語小説とあり、他の3作とは異質である。その経緯や過程は書簡などをもとに調査され、編集者として雇ったアメリカ人女性レオニー・ギルモアとの間に、後に世界的に名を馳せた彫刻家イサム・ノグチが誕生したことから、二人が出会うことになった出版物としても研究されてきた(堀、Marx 2013、星野)。

しかし、同書の「小説」という名目やジャポニズムという時代性、ギルモアとのロマンスを棚上げし、一人の日本人少女がアメリカで日記をまとめたという設定にしては多分な頻度で詩や詩人について言及されることに注目すれば、詩人ノグチが当時の詩論や詩人観、自身が詩人になった過程を初めて発表した作品として浮かび上がる。堀氏が、本小説はノグチの「自伝的要素の濃い」作品である(68)、と指摘している通り、主人公の朝顔嬢がアメリカ滞在の後半に、詩人と共に生活を経ることを経て詩人になるという展開は、詩人になるつもりがなく渡米し、アメリカ人詩人ウァキーン・ミラーとの出会いを機に詩人となっ

たノグチ自身の辿った道筋と重なる。また、ノグチは1904年に帰国から約17年後、初めて発表した日本語詩集を『二重国籍者の詩』と題している。しかし、ノグチはアメリカにいた当初は「二重国籍」ではなく、「日本」を意識しつつ、国籍を越えるという意味において「詩人」というアイデンティティを見つけたことが、同書から浮かび上がってくる。

ノグチは、ラフカディオ・ハーンについてまとめた *Lafcadio Hearn in Japan* で、「伝記というのは、よくいって『弁明』のようなものである。また、それは明記されていない時に限って表面化されるものである。」(19) と書いている。詩人としての評価を望んでいたノグチだが、ノグチの生涯を全貌できる現在だからこそ、詩集2冊を出し終えた20代半ばに、ノグチが既に考え始め記していた詩の世界を改めて分析する必要があるだろう。本論文では、作品の概要や評価、執筆過程を抑えた後、同小説に記される詩や詩人への言及から浮かび上がってくる詩人ノグチとしての「弁明」を考察する。

1. *The American Diary of a Japanese Girl* : 作品と執筆過程、評価

ここでは、作品の全貌を抑え、執筆過程でのノグチの葛藤や編集者とのやりとりを紹介し、当時数多く書かれた書評の中からいくつか注目することで、同書の背景を抑えたい。

1.1 作品の全貌

“*The American Diary of a Japanese Girl*”は、1901年11月および12月に、*Frank Leslie's Popular Monthly Magazine* にて一部掲載された後、書籍として出版された。ノグチ自身が手がけ、現在把握している作品の出版時期とその内容は以下の通りである。

初版 “By Miss Morning Glory” *The American Diary of a Japanese Girl*. New York: Frederick A. Stoke, September 1902. (Illustrated by Genjiro Yeto.)

再版 By Miss Morning Glory. Yone Noguchi. *The American Diary of a Japanese Girl*. Tokyo: Fuzanbo, October 1904. (Illustrated by Genjiro Yeto.)

三版 By Miss Morning Glory. Yone Noguchi. *The American Diary of a Japanese Girl*. Tokyo: Fuzanbo, November 1904. (Illustrated by Genjiro Yeto.)

四版 By Miss Morning Glory. Yone Noguchi. *The American Diary of a Japanese Girl*. Tokyo: Fuzanbo, 1905. (Illustrated by Genjiro Yeto.)

五版 By Yone Noguchi. *The American Diary of a Japanese Girl*. London: Elkin Mathew; Tokyo: Fuzanbo, 1912. (frontispiece by Yeiho Hiresaki)

翻訳 野口米次郎『邦文日本少女の米國日記』東京：東亜堂書房, 1905.

続編 By Miss Morning Glory. Yone Noguchi. *The American Letters of a Japanese Parlor Maid*. Tokyo: Fuzanbo, 1905. (Illustrated by Genjiro Yeto.)

先述したように、初版には“By Miss Morning Glory”とだけ記されたが、再版以降はノグチの名前入りで出版されている。第三版に関しては、1904年10月に富山房から出版されている「再版」が、10月の発行直後の11月に重版されているようなので、ここでは「三版」としている。また、第五版に添えられた口絵は一新され、カラーの折り込みページである。再版以降、末尾に英語の書評も何編かず掲載されている。

和訳は、ノグチ自ら手がけ、堅苦しい日本語に訳された箇所や、英語版とは内容が一致していない箇所も見られる。また、この翻訳の日本語の読みづらさは堀氏も指摘しているところである(68)。

続編は、初版を刊行したフレデリック・A・ストークス社から出される予定であったが、初版の売上の悪さが原因なのか、計画は中止となった(CEL, no. 128, January 2, 1903)。ノグチは帰国時に原稿を持ち帰り、日本で出版している。これらの重版や翻訳から、詩人として評価されたいと願い精力的に詩集を出しながらも、同書にも強い思い入れを抱いていたことが感じられる。

1.2 *The American Diary of a Japanese Girl* : 執筆から初版刊行まで

執筆過程においては、既にいくつかの関連書籍(CEL, Marx 2013、星野)で解説されているのでここでは簡単に触れたい。

ノグチは、2冊目の詩集*The Voice of the Valley*刊行後、ノグチの詩を最初に発表したジレット・バージェスなどアメリカ人の仲間たちが次々と東海岸に移り一人カリフォルニアに残され、この小説に取り掛かったようである。その過程では、最終的に二人のアメリカ人女性に添削やアドバイスを求めた。一人目に添削した*San Francisco Call*紙の女性記者ブランチ・パーティントンとは、1898年秋頃に知り合ったようだが(CEL, no.20, October 11, 1898)、彼女の添削はなかなか進まず、ノグチがカリフォルニアを離れた後にパーティントンの元へ残していった原稿の返却を要求するなど、完成には程遠かったようである。その後仕方なく、ノグチ一人で200ページほど執筆したこともあったようだが、書簡には、不満が残った原稿を全て暖炉で燃やしたとある(CEL, no. 88, July 23, 1901)。

挫折感を味わった後の挑戦で、わずか4ヶ月で原稿が完成し、仕上がりについて、「とても満足がいて、見るたびに顔が緩んでしまう」と書いている(CEL, no. 88, July 23, 1901)。この背景には、1901年2月1日*New York Herald*に掲載した広告(Marx, 2013, 63)を見て応募をしてきた、同作に関わる二人目のアメリカ人女性レオニー・ギルモアの仕事が大きいと思われる。ギルモアがどの部分をどのように添削したのか、具体的な証拠は残っていない。しかし、日本人が200ページほどの作品を英語で執筆するのは難易度の高い挑戦であり、ギルモアの添削に信頼を置いていたことが当時のノグチからギルモア宛ての書簡を通して想像できる。「これを、貴女の思うままに直してくれないかな。バカに長い段落など短くしてもらえと思う」(CEL, no. 75, April or May, 1901?) や、「恐れずに手を入れてほしい! 僕には、貴女がとても遠慮がちに修正しているように見える」(CEL, no. 81, April 25, 1901)、「もし耳障りな文章や、うまく表現されていないところを見つけたら、躊躇しないで思うように手直しして欲しい。」(CEL, no. 79, April 1901?) などに見られるように、添削する箇所や方向性まで全面的にギルモアに任せていた様子が見受けられる。また、ノグチが繰り返し添削を依頼する書簡からは、逆に、ギルモアができるだけノグチの執筆した原文を活かそうとした姿勢を読み取ることができる。出版社に原稿が受け入れられた時点では、編集者が「ここ数年見た中で最高の出来だ」(CEL, no. 88, July 23, 1901)とノグチに伝えたほど、期待が高かったようである。しかし、同書は「謝辞」のような部分を含まず、かなりの時間を費やしたであろうギルモアの名前が編集者として公表されることはなかった。

1.3 作品の評価

同書の初版刊行は、10月初め、クリスマス前のプレゼント購入時期だということもあり、短い案内なども含めて何十かの書評が書かれたようであり(そのうち60本以上がノグチの手にも渡ったという)、注目度の高かった作品といえる(*Diary*, 2007, 134)。書評の内訳として、約半分が好意的あるいは中程度

の評価、残りの半分のうちの大半は評価を明言せず、最後の1～1.5割は否定的であったとマークス氏は分析している (*Diary*, 2007, 137)。

まず、作者は日本人かアメリカ人のどちらなのかという推測が何本にも見られる。「朝顔嬢の表現には日本人らしさが見られるが、行間にアメリカ人らしさが見え隠れしているような気がする」(*Milwaukee Wisconsin*, quoted in *Diary*, 2007, 136)、というものや、「朝顔嬢が英語の慣用句に慣れ親しんでいることはわかるが、彼女の言葉遣いにはやはり日本人らしい特徴が見られる…」(*The Post*, Chicago, quoted in *Diary*, Nov. 1904. 4) というものは、見事に作者ノグチと編集者ギルモアの関係を見抜いているかのようである。「アメリカ人か、日本人のどちらが書いた作品であるとしても、とても上手く書かれている」(*THE TIMES*, Brooklyn, quoted in *Diary*, Nov. 1904. 2) と曖昧に書かれたものもあった。いずれにしても、ギルモアが添削中に意図して残したであろう日本人らしさが、朝顔嬢の英語に透けていたことを当時の多くの読者たちが見抜いていたといえる。最終的には、事情を知っていたノグチの友人の一人、フランク・パットナムが、出版から約2ヶ月後に「これは、ノグチの悪ふざけでは？」と明かしてしまったようである (*Diary*, 2007, 141)。

好意的な感想も寄せられた。「朝顔嬢は賢さと天真爛漫なところを兼ね備えている。彼女の手紙〔日記?〕は宝石のようだ。朝顔嬢の持ち合わせる知恵と無邪気なところは、文学の通を喜ばせる」(*THE JOURNAL*, New York, quoted in *Diary*, Nov. 1904. 2) というものは、純粋に朝顔嬢の辛口で素直な表現に好意を持ったようである。また、「朝顔嬢は、風変わりで、ロマンチストで、単純で、かつ賢い。陽気な優雅さと確固たるスタイルは、彼女が芸術家であり、日本の伝統に忠実であることの表れだ…」(*THE TRIBUNE*, Chicago, quoted in *Diary*, Nov. 1904. 3) というものからは、芸術的な評価も感じられる。「この本は、詩人によって書かれ、詩人の夢が詰まった作品である。全く独創的で、他に比較できる作品がない。…本書には、思いも寄らない魅力と、明るいユーモア、繊細に作られた皮肉な言葉、そして詩の妖精が——そしてその力は疑う余地のないもの——が込められている。」(*The Gazette*, quoted in *Diary*, 1912.) というふうには、詩人が書いた作品だと早くからそれを見抜いていたものもあった。

否定的な書評には、朝顔嬢の言動に落胆を表すものがあり、やはり同時代のジャポニズム小説に描かれた日本人少女の影響の大きさが感じられる。「真の日本人少女の会話が英語に訳されて、朝顔嬢のようになってしまうと考えるに、我々は、日本人女性というものの言葉遣いや文の構成は、男性とは違い、もっと詩的で魅力的なものであり、決して奇妙ではないと理解している。」(*New York Evening Sun*, quoted in *Diary*, 2007, 136) とあり、従来と異なる日本物語を描こうとしたノグチの意図は逆に、読者に落胆を与えたと言える。また、朝顔嬢は、爆発的に売れオペラにもなった『蝶々夫人』(*Madame Butterfly*) について、次のように露骨に批判した。「『蝶々夫人』を書いた高名な著者は悪事氏 (Mr. Wrong) でしょう？

(日本人は、LとRの区別がつかないってご存知だった？ むろん、悪事氏 (Wrong) と呼ばれるに相応しいことは疑う余地もないのだけれど)」(*Diary*, 2007, 119) この朝顔嬢の態度は、次のような否定的な反応を呼んだ。「朝顔嬢は、ピエール・ロティやジョン・ルサー・ロングが描いてくれた繊細な女性らしさを批判している。しかし、正直に言うと、我々は朝顔嬢のいう真の姿よりも彼らの作り話の方を好むのだ、たとえ朝顔嬢の描くものが本物の姿だとしても。」(*Diary*, 2007, 139) 宇沢氏が「なぜ受けると分かっているジャポニズム小説ではなく、ジャポニズム (小説) 批判の内容をこれほど盛り込んだ朝顔嬢小説を書いたのかがわからない」(宇沢, 2008, 182) と論じるように、最も想定されていた読者は離れていってしまったようである。出版から2ヶ月程経つと、書店から出版社に返却され始めたようだが (*CEL*, no.128, January 2, 1903)、これは否定的な書評の数以上に実際の評価が低かった現れではないだろうか。

堀氏は、アメリカという移民の国において、「真正なる日本の姿を伝えたいという野心を抱き、そこに使命を感じていた」という意味で、同小説は「＜二重国籍者＞ノグチの原点となる作品」(77)と論じている。読者は、朝顔嬢が真の日本について伝えようと張り切る姿を見る一方で、初渡米とは思えぬ面も見せられる。また、「詩人になる」過程で要となったアメリカ詩人の寛大さから、アメリカについても考えさせられる。そして最終的に朝顔嬢の将来はどうなるのか、という答えのない問いもある。ノグチ自らが「二重国籍者」という用語を用いる以前から、この用語が示唆するような両国に通じる要素が、同書に見られたといえる。

2. 作品に見られる詩人ノグチの“Apology”

朝顔嬢の日記は、日付とその日の記載で構成されており、ほとんど一文ごとに改行されている部分も多く、この作品全体が、一つの長編の自由詩のようでもある。そのような作品において、本章では詩(“poetry”や“poem”)への記述を一つの特徴と捉え注目する。朝顔嬢の設定を考えれば、日記中の不自然な英語の言葉遣いや言い回しは初めて海外に行って英語を使うのであるから想定範囲内であり、アメリカ体験についても、自国の文化を中心にアメリカ文化を語るようであるが、異文化間での交流がまだ殆ど行われていない時代の少女の無邪気で飾り気のない体験記と捉えられもする。しかし、少女のその他の記載、例えば、着物や洋服など身支度のあれこれ、肌の色や見栄え、渡航中の不安やアメリカ人男性への興味、友人関係の悩み、アメリカ文化に対する見解や批判などの合間に見られる、詩や詩人についての記載の数の多さは、ノグチの詩人としての「弁明」抜きには説明しにくい。以下に、そのような詩人や詩に関する記述から、自伝的な要素や当時のノグチの詩人観とその後の発展を考察する。

2.1 「渡行前(ママ)」(“Before I Sail”)

同小説の第1章目「渡行前」は、朝顔嬢が渡米に向けて準備中の日記だが、早くも、詩への記述がたびたび登場する。詩という言葉は朝顔嬢が日常的に用いることが演出され、詩の価値を理解し詩を暗唱できることなどは、朝顔嬢が荷造りと同様に強調している部分である。日記は以下の初日の記載である。

東京、9月23日

私の人生の新しいページが開かれようとしています。

海外への旅行——メリケン見物、これは普通の出来事ではありません。6世紀も遡ることのできる私の家族にとって実に初めてのことなのですから。

今日、私が夢に見たアメリカ——それは一匹の蝶がキラキラ輝く朝露をすすっているようなものでした——は、庭にいる無数のスズメの鳴き声によって壊されてしまいました。

「チュウ、チュウ！チュウ、チュウ、チュウ！」

悪いスズメ達ですこと！

私の夢は妄想にすぎない楽しいものでした。

夢はおとぎ話のようでなければ夢ではありません。そこが詩と似ているところでもあるのです。

私の夢がもし実現したら！(Diary, 2007, 3)

このように初日から朝顔嬢の独特な世界観が広がる。原文には、「メリケン見物」は“Meriken Kenbutsu”、スズメの鳴き声も“Chiu, chiu! Chiu, chiu, chiu!”とローマ字で書かれ何の注釈もない。このように、同書

を通して数多くの日本語の言葉、例えば「瑞穂の国」「金比羅さん」「さら！さら！さら！」「異人」など、日本語学習の初級者では知らないような言葉が、注釈なくローマ字で記載されている。前後から意味を想像することができればエキゾチック性を楽しめそうではあるが、英語話者にとっては、そこだけ意味を汲み取れない、という箇所も多いであろう。朝顔嬢が夢想しているアメリカ行きのように、自然の情景を比喩に詩的に仕上げたいという意図も見られる。その後、夢と詩を並べてその儚さを説くなど、唐突に、初日から詩への思いが登場する。

渡米前で注目すべき記載の一つは、朝顔嬢が渡米準備として19世紀後半に有名であったロングフェローの詩を暗記しようとするところである。朝顔嬢は、埃まみれになったロングフェローの詩集を取り出し、ロングフェローは自身の詩集が日本の少女に読まれることを想像しただろうかとつぶやく (*Diary*, 2007, 6-7)。さらに、ロングフェローはアメリカでは皆知る詩人であり、その詩は決して独創的でないと言いつつも、「人生讃歌」(“A Psalm of Life”)をはじめとする有名な詩を挙げる。そして朝顔嬢の好みに関わらず、アメリカの女性たちの間で崇拜されている詩人の有名な詩を引用くらいできなければ、馬鹿をさらけ出すことにもなる、と続けている (同上)。18歳の少女がここまで真剣に詩人について考えている演出からは、詩人ノグチが透けて見えるようである。ノグチ自身、渡米前からロングフェローの詩を読んでいたようである。ノグチは後に、『米国文学論』(1925年)を刊行しているが、同書内でもロングフェローについて、「先駆者としての彼の価値は歴史的なもので、彼が善良な傳統の使徒としての態度は尊敬に値する」と論じている (18)。しかし、同文学論に「彼に個性が無いことを論ずる以前に、彼の時代は文学的個性を必要としていなかった」と書くように、ロングフェローはノグチが個人的に仰ぎ見る対象にはならなかったようで、個別に章を立てて取り上げている3人の詩人は、ウァキーン・ミラー、エドウィン・マーカム、ウォルト・ホイットマンであった。一方、ノグチが実際に暗唱するほど愛読していたのは、エドガー・アラン・ポーの詩であった。ところが、ノグチはカリフォルニアで初の詩集が刊行される直前、ポーの詩を盗作したと非難された事件があった。ポーを敬愛するノグチとして名が知れていた以上、敢えてポーを出さずにロングフェローを全面に出し、朝顔嬢の素性を隠す狙いもあったのでは、とマークス氏は論じている (*Diary*, 2007, 158)。ノグチが後に『ポオ評傳』を執筆したほどポーを意識していたことを考えると、朝顔嬢の日記にはノグチの好みが全て反映されているとは言い難い。しかしノグチは日本にいる時から詩を読んでいた自身の渡米前を振り返り、詩に関しては時には好みに関わらず潮流にも目を向ける姿勢などを、理想や自身への反省も込めて戦略的に描いたのではないだろうか。

2.2 「海上」(“On the Ocean”)

航海中の日記である2章目は、最も短い章となっている。ノグチは、編集者ギルモアへの手紙でも、「海の箇所はそんなに面白くなりようがない、海はグレーというか無色で、読者に読ませる劇的なことなど起こらない」、と述べている (*CEL*, no. 69, 25th, 1901?)。ノグチは自身が渡米時に乗船した船と同名の「ベルジック号」でアメリカに向かう朝顔嬢の心境や、共にアメリカに向かう叔父との会話を中心となるが、ノグチはその中にも著名な詩や詩人を織り交ぜた。

イギリスの詩人バイロンは、『チャイルド・ハロルドの巡礼』から引用された「我々はいつ死んでもおかしくない、『墳塋あらず、棺あらず、哀鐘鳴らず、人知らず。』」(*Diary*, 2007, 15. 和訳は土井晩翠)と共に登場する。ノグチとバイロンの詩との出会いは、「ロッキー山脈のバイロン」と呼ばれ、自身もバイロンを崇拜していたミラーと出会う前に遡る。「バイロン卿は当時、私が気に入っていた詩人だった」(*Story of Yone Noguchi Told by Himself*, 32)と語るほど、初期の頃から親しみがあつた詩人のようである。後

年にも、「英国には詩人は多いけれども実際に大陸的である詩人は少ない、いひ換えると世界的詩人は英国に少ない、バイロンの如きは此数の少ない中で一番偉大な英国詩人であつて、…（『書斎の消息』、65）と、賞賛している。

テニソンは、「ロータス・イーターズ」（“The Lotos-eaters”）にまつわるエピソードがある。朝顔嬢は、詩的な感性においてテニソンと日本人は違うと言ひ、早くもベルジック号の船上で詩人になりすまし同じタイトルで朝顔嬢版の詩を書き始めているのだ（*Diary*, 2007, 15-16）。ノグチ自身、本書を執筆する前に「ロータス・イーターズ」というタイトルで英詩を書き、フランク・パトナムにも添削を頼んでいたが（星野、83）、ここでそのノグチ版を披露しなかったのだろうか。続けて、「叔父さま、… 私の『ロータス・イーターズ』は『湖上の美人』と同じくらいの長さになるでしょう。でもね、叔父さま、私の作品はテニソンのものよりも、長いだけではなくて中身もよいものにするつもりです。でも、桂冠詩人から花冠を奪うなんて、優しい日本の少女がすべきことではないですね、テニソンは良い方でしたから。」（*Diary*, 2007, 16）と続ける。宇沢氏が朝顔嬢の特徴の一つとして、「文学的教養と野心がある。幾度となく、詩、小説、日記など様々なジャンルの文章に挑戦し、その素養と（無根拠な）自信のほどを垣間見せてくれる」（宇沢、2008, 172）と挙げているが、「無根拠な自信」はそのまま詩人ノグチのものであったといえるだろう。ノグチは、渡米前に英語学習のために読んだ『自助論』（*Self-Help*）を通して、テニソンに関心を持つようになったようである（堀、23）。テニソンの詩への関心は続いたようで、ノグチは、著書 *The Spirit of Japanese Poetry* の中で、テニソンやブラウニングの詩において発句の効果を論じられる点も論じている（堀、209）。

さらに朝顔嬢は、「詩を書くなんて、時間がかかること」（*Diary*, 2007, 16）とつぶやいているが、詩を書くことに葛藤した経験なくしては、18歳の日本人少女が船の上で突然つぶやかないことであろう。

このように、朝顔嬢の詩に対する野望は、執筆者を知らなければ身の程知らずの少女と思われるものだが、若い詩人ノグチを当てはめることで、詩人として成功したい野心の現れと読み取ることができる。

2.3 「米國に於いて」（“In Amerikey”（sic））

アメリカに到着後の朝顔嬢は、特に大きな事件もなく、初めて経験する西洋の文明大国・アメリカでの暮らしを驚きとともに描写していく一方で、詩に関する記載を一層増やしていく。ここには、実際のノグチのアメリカ生活でも、暮らしの中で詩が占める割合は時が経つにつれて増えていったことが反映されていると言える。

まず登場するのは、渡米前から準備していたロングフェローである。友人となったエイダとの会話には、ロングフェローの「人生讃歌」の冒頭を暗記していたはずが、いざという時に忘れてしまったものの、エイダからは身構えていたほど尋ねられずホッとした事件も登場する（*Diary*, 2007, 28-9）。そうこうしているうち、朝顔嬢は、「領事夫人からロングフェローに関して悲しいことを聞きました。最早、ロングフェローはアメリカの婦人達にとっては偶像の対象ではなくなったというのです。… お気の毒に！」（*Diary*, 2007, 30）と記載する。2冊の詩集を出版したばかりのノグチにとって、ロングフェローほど有名な詩人の評判が一過性であったと知ったことは、自身の詩人としての評価とその継続性を考えるきっかけとなったかもしれない。

この後は、他の詩人たちへの言及が見られる。中にはノグチが後に考察を発表しているものもある。例えば、キーツやブラウニングがそれである。キーツについては、朝顔嬢が「私はスマレが大好きです。もちろんそれは、尊敬するジョン・キーツの好きな花だったからです」（*Diary*, 2007, 30）と参照する。キー

ツもノグチのカリフォルニア生活の初期、まだミラーに会う前から読んでいた詩人の一人で、『戀愛の詩人』でも冒頭の一章を当て、キーツの詩を何篇か取り上げながら論じている。ブラウニングについては、「ドロシー！ 彼女は、ウィリス夫人のところで下宿していて、ブラウニング夫人の金髪の娘なのです。（しかし、ブラウニング夫人には失望しました。詩人ブラウニングの親戚かと期待したのですが、違ったのです）」(Diary, 2007, 41) と書かれている。ミラーが、ロンドンで詩集 *Songs of the Sierras* (1871) を出版し賞賛された際にブラウニングにも会っており、またブラウニングの詩と比較されるという名誉なことがあった (Frost, 64)。ノグチがカリフォルニアでブラウニングを読んでいたかどうかはわからないが、ミラーから話は聞いていた詩人の一人だったのではないだろうか。後に同じく『戀愛の詩人』でブラウニングにも一章を当て「セルフ・メード・マン (Self-made man) で、学歴からいふと無教育でも彼の心は眞實に發達した…彼は獨立獨歩の自由人であった」(38) と好意的に書いており、慶應義塾を退学し独学で詩人となったノグチ自身の姿を重ねているのではないかと思われる。また、堀氏は、ノグチの著書『宣戦布告』に含められている「倫敦炎上」という詩の末尾2行「私共は現實に生きるもの / 明日のことなど、神様か犬か猫に、食はせておけ！」が、ブラウニングの詩「人間は永劫をもつ」を念頭に置いている点を指摘しており (堀、413)、ノグチが長きに亘って参照していた詩人であったことがうかがえる。

同小説が進むにつれ、登場する詩人たちの順番は、ノグチが渡米前から知っていた詩人たちから、徐々に、ノグチがミラーやカリフォルニアの知人から教えられたり、その頃に傾倒した詩人たち、というように移行しているように見られる。ミルトンに関しては、ヨセミテ溪谷に出かけた際、ミルトンの詩集を持参して、その後の詩集 *The Voice of the Valley* ではミルトンのスタイルを真似ていたことを告白しており、亀井氏も同詩集はミルトン調で満ちていると論じている (Kamei, 1965, 15)。同小説では、「ディナー、というより満足な言葉があるでしょうか。私は、『ヒップ・ゲー』なディナーを頂いたのです。(今回に限って、中国人の英語を使わせていただきますわ) 今回のような魅力的な重々しさは、ミルトンの名誉ある詩のようでした。スカイラーの家自体に、ミルトンの存在を感じます。」(Diary, 2007, 52) という形で登場する。ペルシア詩人ウマル・ハイヤームにも触れている。ハイヤームの『ルバイヤート』は、英語に翻訳され1890年代のカリフォルニアの詩人たちの間で読まれていたようであり、ノグチはミラーを通じて知り合ったエドウィン・マーカムと共にハイヤームについて語り合ったことや (堀、38)、ノグチが詩人デビューした際にポーター・ガーネットからハイヤームの詩集が添えられた手紙を受け取ったなど (堀、44)、慣れ親しんだ経緯があったようである。朝顔嬢は、「スカイラー夫人がウマル・ハイヤームの『ルバイヤート』を私のために選んでくれました。叔父さまは、『アメリカの婦人は、ウマル・ハイヤームとチキンサラダには目が無いのだ』と続けました。」(Diary, 2007, 65) など、何度か言及している。

ホイットマンの詩については、ノグチは他の上記の詩人とは比較にならないほど影響を受けているはずであるが、どのような意図があったか、同書においてのホイットマンの登場は控えめである。「午後、領事婦人を訪ねたら、ウォルト・ホイットマンに関する彼女お得意の話を披露してくださいました。…私は領事婦人から借りた、ホイットマンの分厚い本を抱え、苦い顔をして自分の部屋に戻ってきました」(Diary, 2007, 85) この「分厚い本」は、ホイットマンの『草の葉』だと言われている (Diary, 2007, 178)。亀井氏は「ホイットマン流の自由詩は、英語で定型や押韻などを試みられる筈もなかったノグチに、みずからの詩的表現の可能性を教えた」(亀井, 2007, 13) と、その影響の大きさを論じ、ノグチが「東洋のホイットマン」とまで呼ばれたこともあることに触れている (同上, 17)。ノグチは、詩の世界へ入る手段を提供してくれた偉大な詩人に喩えられ喜んでいたはずだが、ホイットマンの詩について教えたのはミラーということもあってか、ホイットマンへの言及は最小限に留まり、その後ミラーが何ページにも

わたって登場するのだ。

終盤の、朝顔嬢が詩人と共に生活し詩人になるという展開は、ノグチの私小説的な要素が最も色濃い部分である。朝顔嬢の詩人との暮らしは、叔父からの以下の唐突な誘いで始まった。

私は一人の詩人を知っているのだ。この詩人は丘の上で夢を見たり、石の壁を作ったりしていて、無二の人だ。詩人の家や庭は誰にでも解放されている。私も、アカシアの木の香りの中にぼんやりとするような暮らしに惹かれる。もしお前も詩的な生活をしてみたいと言うなら、詩人に会って相談してみようと思う。(Diary, 2007, 90)

このような誘いに対して、朝顔嬢は「素晴らしいわ、叔父さま。小説のような感じね。その方は結婚しているの？」(Diary, 2007, 90)と興味を示す。ノグチ自身は、ミラーについて知った後しばらく経って『ウェブスター辞典』でミラーの名前と知名度を確認して出かけたと書いているが、この朝顔嬢には迷う気配すらない。詩人は結婚しているかなど、朝顔嬢の口から出るいくつかの些細な質問には少女を過度に演出させるような部分もある。しかし、この会話の終わりには「それでは叔父さま、ぜひともそこに住まわせてもらって、詩人になりましょう…次の詩の題目は『失樂園』かしら…」(Diary, 2007, 90)と即決し、叔父と朝顔嬢は詩人の住処に住むことになる。小説の設定では、最初に詩人の話が出たのが1900年1月29日、そして2日後の31日にはすでに詩人宅「高丘」(The Heights)に移り住んでいるのであるから、急展開である。高丘は、ミラーの住処でノグチが居候した所と同名である。朝顔嬢を受け入れた詩人は「ハイネ」と名乗り、これはウァキーン・ミラーの本名「シンシナタス・ハイネ・ミラー」のミドルネームである。ハイネは、「詩人」(Poet)あるいは「詩人さん」(Mr. Poet)として、詩に関連する用語(Poem, poetical, poetness, Poesy)と合わせ、生活や会話の中心となっていく。この箇所を読んで朝顔嬢の正体を突き止めた人もいるのではないだろうか。

ハイネの高丘に移動した初日に、朝顔嬢は「叔父さま、私、自分が別人のように感じるわ。すでに詩人になった気分よ」(Diary, 2007, 91)と日記に書いている。詩に親しむ生活を送っていたものにとって詩人になるのは自然な流れであると訴えるような書き方である。朝顔嬢がこれまで詩や詩人について記述してきた日常的な背景の到達点は、自分はこうして詩人になった、と「弁明」するためだったのではないだろうか。ここは特にノグチの自伝的な部分を初めて自身で文字化しているところと言えるだろう。詩を書いて発表し、誰かに詩人として認められたのではなく、詩を書き始める前に自身で「詩人だ」と宣言してしまったのである。自らの意思と行動で詩人になったという過程が、その後の生涯にわたって詩人であることへの固執が強かった点を考える上でヒントになるだろう。また、同書では言及されていないが、突然訪れたノグチを4年間も置いたミラーへの感謝は、『米国文学論』に「私は四年足らずの年月を親切な彼の屋根の下で暮らした、私はそれに對して深い感謝を持って居る」(41)をはじめとして、いくつかの出版物で見られる。

この後は、ノグチ自身がミラーとの4年間の暮らしで学び、ノグチがのちに展開する詩論や詩人観を朝顔嬢に語らせる。朝顔嬢と詩人の会話は、ノグチが後に*The Story of Yone Noguchi Told by Himself*に書いたミラーとの暮らしの原型とも見られる。特に以下などがそうである。

「自然の中に大きな教訓があるのだ！我々はそれを文字にしようとするが、失敗する」そう言って詩人はため息をつき、木を見上げました。そして私の方を向き、問いかけたのです。「君には森の声

なき歌が聞こえるかな？」私はうなづきました。「沈黙！沈黙だよ！」詩人は呟きました。(Diary, 2007, 94-95)

「春には何千もの花が咲く」、と詩人は言いました。「だが、多くは、バラやスマレのように大々的には賛美されていない。名のない花だってある。それでも、笑みや香りをそよ風に送り、不満も言わずに散るのだ。これらの花はそれで満足し、神に忠実だ。詩人の生涯もそうでなくてはいけない。」(Diary, 2007, 104)

ここに朝顔嬢がミラーとの会話として書き留める「自然」「沈黙」「単純性」は、亀井氏が『ナショナルリズムの文学』で詳しく論じているところであり、ノグチの「いかにも日本的『精神』を、『物質』的アメリカの詩人が真の詩の本質だとして説いたことは、ノグチにとって大きな自信と激励になったに違いない」(亀井、1988, 224)とあるように、詩を書こうとしているノグチにとっては、これまでの感覚・感性が有効だと感じられたのは、ホイットマンの自由詩を学んだのと同じく、重要なことだといえる。そして、この感覚をもって自身の渡米前からの数年間を振り返ると、自身の詩的な感性や、言葉にし難い自然などが一本の線につながって見えたのではないだろうか。ここを軸にして執筆したのが朝顔嬢の日記だといえる。

また、詩人ハイネがある場所の土を掘り起こそうとした際、朝顔嬢が自身の詩をそこに埋めてしまったことを告白し、ハイネが何故良い詩を埋めたのだと尋ねたのに対し、「詩人は自分で書いた詩を埋めないのですか？最高の詩は出版されないものである、最も素晴らしい詩は言葉で書き表されていないものであるのではよ。ダンテ・ガブリエル・ロセッティだって、『人生の家』という詩集は彼の妻に捧げたもので、何万人もの人妻のためではないからと埋めてしまったのです。…」(Diary, 2007, 99)と答える。これらは、後にノグチが繰り返して論じ、1913年—1914年に再渡英した際の講演を出版した*The Spirit of the Japanese Poetry*に記される「書き記されない詩 (unwritten poems)」「沈黙の中で詠われる詩 (sung in silence)」が最良であり、「詩に生きるのが大事なのであり、詩が書き表されたり出版されるなどはあまり重要ではない」(16)などの詩論につながる。

朝顔嬢は最後、17文字にまとめた別れの一句を読み、叔父と共に詩人ハイネの元を去り、ヨーロッパに行く叔父とは別れ、新聞で見つけた家にメイドとして行くという結末になる。これが続編の *The American Letters of a Japanese Parlor Maid* へと続くのである。

おわりに

ヨネ・ノグチが約11年に及ぶ米英生活で出版した4冊の英語の出版物のうち、3冊の詩集とは異質の散文小説が、本論文で扱った *The American Diary of a Japanese Girl* である。同書を、詩や詩人というキーワードに注目して読み解いていくと、詩人ノグチが自身の歩んできた数年間を振り返った自伝的な作品、ことに詩人ノグチが詩人となった過程の「弁明」の要素を多分に盛り込んだ作品と言えるのではないだろうか。特に、ミラーから教えられた詩における「自然」や「沈黙」に焦点をあてたノグチは、まだ未完成ではありながらもそれらを自分が詩人となった過程に当てはめて、自分の言葉に置き換えてみたのである。ノグチのこうした詩人観や詩論は、英語では1913-14年の英国での講演をまとめた *The Spirit of Japanese Poetry* や半生を描いた *The Story of Yone Noguchi Told By Himself* に、日本語では『米国文学論』や、第一書房から出版している『野口米次郎ブックレットシリーズ』などでまとまった作品になっているが、同

小説はその最初の「覚書」のような位置付けだったともいえる。

日本人として渡米したノグチが、「詩人になる」ことにより、「詩人」というアイデンティティを柱にアメリカで生きていった過程では、アメリカに深く適応する必要があった。そして、海外に深く適応したことが、日本において周囲の日本人とは異なった生涯を意識させ、自ら「二重国籍」と皮肉った。同書は、ノグチの著作の中で、ノグチにとっての詩人となったことの意味や国籍を考えさせる、最初の一冊とも言えるだろう。

参考文献

宇沢美子『ハシムラ東郷 イエローフェイスのアメリカ異人伝』東京大学出版会, 2008.

亀井俊介『ナショナリズムの文学』講談社学術文庫, 1988.

---『解説 復刻版 ヨネ・ノグチの英文著作集～詩集・小説・評論～』s Edition Synapse, 2007.

土井晩翠『チャイルド・ハロルドの巡禮』新月社, 1949.

(参照日、2017.9.5 <http://books.salterrae.net/osawa/html/childeharold.html>)

野口米二郎『日本詩歌論』白日社, 1915

---『書齋の消息』第一書房, 1927.

---『米国文学論』第一書房, 1925.

---『邦文日本少女の米國日記』東亜堂書房, 1905.

---『戀愛の詩人』第一書房, 1926.

羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』彩流社, 2005.

星野文子『ヨネ・ノグチ 夢を追いかけた国際詩人』彩流社, 2012.

堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』名古屋大学出版会, 2012.

読売新聞「英詩集From the Eastern Sea」1903年11月25日

Atsumi, Ikuko. *Yone Noguchi, Collected English Letters*. The Yone Noguchi Society, 1975.

Frost, William. O. *Joaquin Miller*. Twayne Publishers, Inc., 1967.

Kamei, Shunsuke. *Yone Noguchi an English Post of Japan*. The Yone Noguchi Society, 1965.

Marx, Edward. " 'A Different Mood of Speech' : Yone Noguchi in Meiji America." *Re/collecting Early Asian America – Essays in Cultural History*, Edited by Josephine Lee, Imogene L. Lim and Yuko Matsukawa, Temple University Press, 2002, pp. 288-307.

---. *Leonie Gilmour: When East Weds West*. Santa Barbara: Botchan Books, 2013.

Matsukawa, Yuko. "Onoto Watanna's Japanese Collaborators and Commentators." *The Japanese Journal of American Studies*, No. 16, 2005, pp. 31-53.

Noguchi, Yone. *The American Diary of a Japanese Girl*. Annotated by Edward Marx and Laura E. Franey, Temple University Press, 2007.

---. *The American Diary of a Japanese Girl*. Fuzanbo, November 1904.

---. *The American Diary of a Japanese Girl*. Elkin Mathew; Fuzanbo, 1912.

---. *Lafcadio Hearn in Japan*. Edited by Shunsuke Kamei, *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*, Edition Synapse, 2007.

---. *The Spirit of Japanese Poetry. Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*, Edition Synapse, 2007.

---. *The Story of Yone Noguchi Told by Himself. Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*, Edition Synapse, 2007.

本稿は、2016年9月24日の日本アメリカ文学会東京支部9月例会、近代散文の分科会での発表に基づいたものである。英語の引用文献を参照した箇所日本語は、特に記載がない部分は全て星野の訳による。

星野 文子 (和洋女子大学 人文社会科学系 助教)

(2017年11月14日受理)